

Title	一八一九年とバルザックの青年群像
Sub Title	1819 et les jeunes personnages balzaciens
Author	西尾, 修(Nishio, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.98- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一八一九年とバルザックの青年群像

西尾修

一八三〇年五月から六月にかけて「モード」紙に掲載された短篇『さよなら』の中で、バルザックは「一八一九年の夏」がとり分け暑かったと語っている⁽¹⁾。舞台はパリ近郊のリラダンの森。そしてこの地をバルザックは熟知していた。一八一七年から数年にわたって、父ベルナル・フランソワの友人の住むこの地で休暇をすごすのが習慣となっていたからである。では「一八一九年の夏」にバルザックがリラダンに居たかといえは、夏の極く初めに訪れただけで、八月には、ヴィルパリジに移った家族と離れて、単身バリのレディギエール街の屋根裏部屋での生活を始めていた。とすれば、この年の夏の暑さはバリエで経験されたものであろう。だが、いずれにしても、暑さの体験を読者に語りかけるといった、そのリアルな筆致から推して、両親の反対を押し切って文筆家としての自立への方向を選んだこの年の記憶は、十年の歳月を経て『さよなら』を執筆した頃になっても、よほど鮮明な形でバルザックの脳裏に刻まれていたものと思われる。では、バルザックにとって格別に関心の深かったこの年「一八一九年」は、「人間喜劇」全体の中に、どのような形で反映されているのか、バルザックの世界に登場する青年群像を対象としながら、その点を追って行きたい。

代訴人デルヴィルは「人間喜劇」の中にあってピアンションと並ぶ高潔な人物として描かれているが、一八三〇年二

月に「モード」紙に載り、二ヶ月後に「私生活情景」の一篇として上梓された『ゴブセック』に、かれの独立譚が語られてゐる。二十五才の貧しい法学士デルヴィルは、先年来、隣人づき合いを深めていた老高利貸ゴブセックから、いはば担保も保証人もなしで高額の貸付を受けて、売りに出ていた代訴人事務所を手に入れ、これが後の成功への出発点となった、という挿話であるが、この予期せぬパトロンに激励されてデルヴィルが一本立ちしたのは一八一九年のことである。⁽²⁾また、シャルル・グランデが父の勧めでパリを発つてソーム・ジュールの叔父の許に寄食し、ウジェニーとのゆきづりの恋をも投げうって、奴隷商人として異国の地へと旅立ったのも一八一九年のことである(『ウジェニー・グランデ』一八三三年)。父ギョームが破産の果に自殺し、悲嘆に暮れる暇もなく、家名再興のために財を求めて出発したのである。だが、これらは、どちらの場合も、一八一九年にパリ、あるいは地方に見られた挿話なのであって、小説の背景全体が一八一九年周辺に定着されているわけではない。そして、文字通り一八一九年秋から冬にかけてのパリを舞台とした作品として、『ゴリオ爺さん』(一八三四年―三五年)と、『ルイ・ランベール』の増補部分『叔父への手紙』(「ルイ・ランベールの未刊の手紙」一八三五年)をあげなければならない。

多感な青年ウジェーヌ・ラステイニャックが、昨年来の地道な法律の研究に見切りをつけて、ひと夏帰省した折に、叔母から無心した紹介状を胸に、パリ社交界の名流ボーセアン夫人の門を叩いたのは、一八一九年十一月のことであつた。⁽³⁾ここにラステイニャックの上層社会への第一歩が刻まれ、やがてゴリオの悲惨な死に立ち会いながら、かれの「教育」は⁽⁴⁾完り、冷徹な野心家への道筋が決断されるのである。一方、『叔父への手紙』によって、一八三二年版の『ルイ・ランベール』には語られていなかった主人公の一面、つまり、ランベールのパリ滞在(一八一七―一八一九年)が読者の前に明らかにされた。四通からなる『手紙』の日付は一八一九年の九月から十一月二十五日とされているが、そこでラ

ンペールは、パリの現実、思想界、政界の混乱を激しく批判している。⁽⁶⁾そして、この手紙を認めて程ない翌年の初頭、この早熟の哲学者はパリを去つたのだつた。ゴリオの死んだ一八二〇年二月と時を相前後してプロアに帰郷したのである。⁽⁶⁾

同じ時期にパリの一隅で貧しい生活を送っていた二人の青年ラスティニャックとランペール。もちろん、この二人が出会つた形跡は「人間喜劇」には見当たらない。現実社会を逞ましく生きる「風俗研究」の中心人物ラスティニャックと、友人の回想の中で語られ、そこでしか真の価値が明らかにされ得なかつた「哲学研究」の主人公ランペール、もとよりこの両者は、バルザックの世界にあって、互いにも遠い存在であつたのだからか。しかしながら、また、ランペールはともかくとして、当時の「あらゆる青年たちと親交を結んでいる」と性格づけられているラスティニャックが、⁽⁷⁾自らの人間関係の中に、ランペールの影を全く見ていなかった、と断定することもできないだろう。そして少なくとも作者バルザックは『ゴリオ爺さん』を構想し、一八一九年の秋から翌年の冬にかけてのパリでの生活を経験する中で野心家へと変貌を遂げる学生の心理と行動の一部始終を文章化しながらも、その一方では常に、ラスティニャックとは対蹠的な人生観を有する青年たちの存在に関心を抱き続けていたに違いない。すでに『金色の眼の娘』の冒頭に置かれた「パリの相貌」の中で、この「地獄」ともいうべきパリにさえ、まれにはあるが「真実の感情」、「高貴な友情」を見出すことができる、とバルザックは陳べているが、⁽⁸⁾『ゴリオ爺さん』でも同様に、パリを支配する苛酷にして「峻厳な法則」に従ふことなく、「美しい魂」をもつて生きる青年たちの存在に触れている。⁽⁹⁾そして、こうした青年たちは、「孤独」を好むがゆえに、また「卑少にして皮相的な社会」に適合できないがゆえに、そこに「長く留まることのできない」のだ、とされている。⁽¹⁰⁾では、パリに「長く留まる」ことのできない「美しい魂」とは、具体的にはどん

な人物を指すのだろうか。その解答としてバルザックは、『叔父への手紙』を構想し、パリに生活したルイ・ランベールの一面を創造したのではないか。

一八三五年八月二十三日の「パリ評論」に載った『叔父への手紙』は、同年の三月初めには起草され、七月には大要が整っていた、と考えられる。⁽¹¹⁾一方、『ゴリオ爺さん』は、同紙上の前年の十二月から同年の二月にわたって掲載され、三月にヴェルデ社から刊本として世に出たものである。つまり、『叔父への手紙』は『ゴリオ爺さん』が上梓されると時を同じくして書き始められ、やがて同じ「パリ評論」紙上に発表されたのであり、ここに、ラステイニャックと同様にパリに生きながら、この野心家とは全く異質な、孤独で純粋な青年像が創造されたのである。さかのぼって一八三四年三月に発表された断片的著作の中に、パリのサロンの列席者の一人としてのルイ・ランベールを見出すことができる。⁽¹²⁾次いで同年の十一月の「ヴォールル」紙に一部が発表され、翌年一月にヴェルデ社から出た「哲学研究」の一篇を構成した『海辺の悲劇』に、この青年哲学者は姿を見せる。とすれば、『ゴリオ爺さん』を制作し、ラステイニャックを創造しながらも、一八三二年にすでに創造していた作中人物としてのルイ・ランベールを、再登場人物として、いかに発展させるか、そのことがバルザックの念頭の片隅に常にあったと思われるのである。

「一八一九年のパリに生きる貧しい青年知識人」というテーマが、もし「人間喜劇」の中に想定されるとすれば、そこにラステイニャックとランベールの親近性が、作品制作史的にも、うかがえるのではないか。一八三四年から翌年にかけて、バルザックは一五年前のパリを舞台に借りて、野心的実際家ラステイニャックの誕生を物語り、他方では純粋な理想家ランベールの怒りと挫折を作品化した。人間を含めて事物のコントラストを小説化することを好んだバルザックは、ラステイニャックを創造すると同時に、同じ地平から出発し、しかも対蹠的な人生を選ぶランベールをこれに配

した、と考えることはできる。そして、この二人の対立関係は、「人間喜劇」のパリに生きる青年群像の二極分解の各々の核となつて、後の諸作品に影を落とすこととなり、四年後の作品『幻滅』第二部に見られる、権力・ジャーナリズムとセナークルの結社員との対立へと鮮明化されて行くのである。

セナークルの初代頭領ランペールは一八二〇年初めにパリを去つた。二代目の指導者ダニエル・ダルテスを中心とするセナークルが活躍する舞台は一八二一年秋から翌年八月のパリである。⁽¹³⁾そしてラステイニャックもまた、名うてのダンディとして同じ作品に姿を見せるのであるが、興味深いことに、ゴリオの埋葬を終えてニュシゲン邸の夜会に出かけてから、ここでオペラ座の定席に現われるまでの約二年間のラステイニャックの行状は「人間喜劇」の中であまり定かにされていない。さらに、より広く「人間喜劇」に生きる青年像を見ると、一八二〇年のパリにはあまり触れられていないことに気付くのである。一八一九年の秋から翌年の冬にかけての『ゴリオ爺さん』の舞台から『幻滅』第二部の世界へと時代が飛んでいるのである。バルザックは一八一九年に文筆家としての道を決断し、しかしながら自作の小説が初めて世に出るのを見たのは一八二二年一月の『ピラッグの跡取り娘』の出版の際であつた。一八二〇年の空隙は、こうした伝記上の事実に関連があるのだろうか。「バルザック書簡集」によれば、一八二〇年から翌年の五月にかけて、バルザック発信の手紙は欠落している。このことと関係があるのか。いずれにしろパリの青年知識人の生きる舞台は、一八二〇年の空白を越えて、『幻滅』第二部の時節へと展開されて行くのである。

「人間喜劇」全体の中でも、その半数近くの小説が王政復古期を舞台としているが、とり分けルイ十八世治下のフランス社会を背景とする作品だけでも全体の三割近くに達している。作者バルザックは、それだけ深い関心を王政復古期

前半に寄せていたのである。さらに年代を絞れば、一八一九年周辺のパリはバルザックにとって、最も思い入れの強い時空間であったと考えられる。ラスティニャックが自らの道を決断し、エチエンヌ・ルーストローが、自作の一篇の悲劇を手にして、「栄光と権力と財」に憧がれてパリに現われたのもこの年であり、⁽¹⁵⁾ 前年にはエミール・ブロンデが上京していた。だが同じ頃パリを立ち去る者もあった。ルイ・ランベールであり、ディード兄弟印刷所に働いていたダヴィッド・セシャルである。この両者の魂は、パリに留まって生きるには余りにも偉大であったのだろうか。いずれにしても、同様に高潔なる人格の青年たち、デルヴィル、ピアンション、アンセルム・ポピノー『セザール・ビロトー』一八三七年)等は、ここを出発点としてパリに定住する。一八一九年パリ。ここを結節点、転回点として、バルザックのパリに生きる青年群像は動き出すのであり、レディギエール街の時代は、そのまま自らの小説世界のダイナミズムの根源となり得たのである。

注

- (1) *Adieu*, La Comédie humaine, tome X. Pléiade, 1979, p. 974.
- (2) *Gobseck*, La C. H., t. II, Pléiade, 1976, pp. 979-983.
- (3) *Le Père Goriot*, Garnier, 1963, p. 42.
- (4) *Ibid.*, p. 283.
- (5) *Louis Lambert*, José Corti, 1954, pp. 125-137.
- (6) *Ibid.*, p. 121.
- (7) *Préface à Une fille d'Eve* (1839), La C. H., t. II, pp. 265-266.
- (8) *Histoire des Teyze*, Garnier, 1966, p. 371 et p. 388.

- (9) *Le Père Goriot*, op. cit., p. 245 et p. 286.
- (10) *Ibid.*, p. 286.
- (11) *Louis Lambert*, La C. H., t. XI, Pléiade, 1980, p. 1484, note de Michel Lichtlé.
- (12) *Aventures administratives d'une idée heureuse*, La C. H., t. XII, Pléiade, 1981, p. 776.
- (13) *Illusions perdues*, Garnier, 1961, p. 229 et p. 537.
- (14) *Ibid.*, p. 184.
- (15) *Ibid.*, p. 210.